

# 頭本元貞が発信した中等学校英語教育

教育内開発コース 白山 映子

The Ideas of English Education for Secondary School Promoted by ZUMOTO Motosada

Eiko SHIRAYAMA

This paper will analyze Zumoto Motosada's way of thinking about the English education through the teaching materials which he engaged in. will be focused. Textbooks published from Chuto Kyokasho Shuppan Kyokai during the Taisho and early Showa period.

In 1897, March 22, Zumoto issued *The Japan Times* (the first English language newspaper which were edited and managed by Japanese editors) and he worked as the proprietor and the director.

He was regarded as an international journalist, as well as, he was a kind of educator. Actually, he engaged in writing and publishing many English textbooks and reading materials, and an English-Japanese dictionary.

## 目次

- 1 はじめに
- 2 頭本元貞
- 3 頭本元貞の英語学習法と時事英語
  - A 実践的英語学習法
  - B 『英語時事会話』
- 4 英語教科書の分析
  - A 英文法・英作文・読本・副読本
  - B *Girl's English grammar, New age easy course; book 1, A new short English grammar*
  - C 臨時定価
- 5 おわりに

## 1 はじめに

学校現場で「新聞を活用した教育 (NIE, Newspaper in Education)」が行われてから30年が経過した。初等教育から高等教育に至るまで、新聞の紙面構成の学習、諸新聞の記事の比較、また自ら新聞を作成する作業がなされている。情報を批判的に読む姿勢が醸成され、メディアリテラシーの向上が期待されている。インターネットによる情報収集や、新聞を購読しない世帯も現れ、紙媒体の記事を読む機会が減ってきている。昨今、学校での新聞利用はこのような活字離れの抑制につながると考えられる。またすっかり定着した表現

である「アクティブラーニング」とも親和性が高い。

英語教育においても英字新聞・英語雑誌の記事を活用した例は珍しくない。その先駆的な役割を担った人物に頭本元貞（ずもともとさだ、1863-1943）がいる。頭本は日本で初めて日本人経営による英字新聞 *The Japan Times* を創刊した英文ジャーナリストである。頭本の活動は新聞・雑誌の編集だけではなく、中等教育における英語教材にも及んだ。

本稿では頭本の略歴に触れ、彼が発信した英語教育の理念と構想を示し、関与した中等学校教科書・読本・副読本などの諸教材を考察したい。

頭本に関する先行研究には阿部俊子による郷土の立志伝中の人物としての評伝や、英学者頭本に焦点を当てた川口康子の論稿がある<sup>1)</sup>。また松永智子による論稿は、頭本が関与した英字新聞・英語雑誌を発信型メディアととらえるものである<sup>2)</sup>。さらに松永は 'The role of English media in modern Japan: Through the history of English-language newspapers issued by Zumoto Motosada' で英字新聞での頭本の役割を論じた<sup>3)</sup>。また頭本が太平洋問題調査会で発言した内容を外交及び思想的側面から論じた拙稿がある<sup>4)</sup>。

こうして見ると頭本が発信した教科書についての考察はまだ本格的な研究対象とはされていない。英文メディアを通しての国策発信に意欲を注いだがためか、時事英語会話や英語教科書に寄与したにも関わら

ず、英語教育者としての認知度は決して高いものとは言えない。実際には頭本は東京府中等学校英語教師の会の会長職も経験し<sup>5)</sup>、英語教材の執筆・印刷・発行を重ねている。頭本経営による印刷業兼出版社ヘラルド社からは、頭本自身の執筆による教材、頭本が編集代表者となり株式会社中等教科書出版協会から教科書・読本・副読本などが出版された。前述の‘The role of English media in modern Japan: Through the history of English-language newspapers issued by Zumoto Motosada’で永松は頭本が関与した10点の教科書を選び、それらが一般的な教科書であると位置づけ、頭本がかつて学んだ方法が反映されていると推測している<sup>6)</sup>。これらの教科書は和歌山大学江利川春雄代表による「明治以降外国語教科書データベース」「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」で閲覧可能ではある。しかし公開されているのは表紙、目次、奥付であり、それだけの情報でこれらのテキストがごく普通のありきたりの教科書であると断定するのは無理があるのではないだろうか。残念ながらテキスト分析が十分に行われているとは言い難い。筆者は可能な限り頭本が関わったテキストの現物に当たり、それらの独自性を考察したい。

## 2 頭本元貞

頭本は1863年1月23日（文久2年12月4日）、鳥取県日野郡黒坂町に生まれた。鳥取中学校、愛知県中学校、東京大学予備門を経て札幌農学校に入学、第4期生として修養を積んだ後に*Japan Mail*の記者となった。同時に伊藤博文の秘書官を兼務し二束の草鞋を歩いて政治とメディアの両輪を歩んで行った。頭本は日本の国情を英語で外国に紹介することをミッションとし、1897年に日本人による初めての英字新聞*The Japan Times*発行した「英文報国」ジャーナリストとして知られている。伊藤が暗殺された後には渋沢栄一の洋行に通訳として随行し、日本の国策を発信し続けた。また出版社経営、新聞社・雑誌社での編集といった出版活動など多面的に関っている。さらに衆議院議員も経験し政治家としての活動も行った。

さらに、頭本は1922（大正11）年3月に来日しオーラル・メソッドの推進者であるHarold E. Palmer（1877-1949）と共に英語教授研究所設立に尽力している。1923（大正12）年5月に文部省内で創立した同研究所は9月の大震災で焼失したが、同年12月の英語教育実態調査会の設置を経て翌1924年に活動が再開

された。この英語教育実態委員会のメンバー50人の中には頭本の名前もある<sup>7)</sup>。第一回全国会員大会が1924（大正13）年10月17日、18日に開かれた。会場は当時沢柳政太郎が校長をしていた成城中学校（新宿区牛込原町にある成城中学・高等学校の前身）で、大会には頭本や、山縣五十雄、堀英四郎など英語教育者の名が連なっている。この大会では沢柳政太郎が会長に、櫻井錠二と頭本が副会長の任に就いている。パーマーの著作の多くは英語教授研究所から出版されているが、著作で使用された音声記号の活字の複製と分譲は、頭本が経営するヘラルド社に委託されたということである<sup>8)</sup>。

## 3 頭本元貞の英語学習法と時事英語

頭本は新渡戸稲造（1862-1933）、内村鑑三（1861-1930）、武信由太郎（1863-1930）<sup>9)</sup>、早川鉄治（1863-1930）、志賀重昂（1863-1927）等と共に札幌農学校で学んだ。内村は第2期生、武信、志賀は第4期生である。札幌農学校は、英語（English）、作文（Composition）、朗読（Elocution）、討論（Debate）、英文学（English Literature）など、授業の殆どが英語で行われ、上記のような人材を輩出したこと周知の事実である。

頭本は1911年に「*Japan Times*」の社長に就任し、同年、中高校生向けの隔週誌『*Japan Times Student Edition*、9月1日号から）を、1912年には中学生向けの月刊誌『*Japan Times*少年号』（*The Youth*、5月1日号から）を創刊している。現在発行されている*The Japan Times ST*は『*Japan Times*学生号』の後継雑誌と認識しても良いだろう。新聞と雑誌の定義は異なるが、『*Japan Times*学生号』は表紙の「contents」を「新聞記事」と記載しているので、ここでは両義的に使用していると考えられる。1914年に「*Japan Times*」を退職したのち、雑誌社兼印刷所「ヘラルド社」（「*The Herald of Asia*」ヘラルド・オブ・エシア）を起し、英文雑誌*The Herald of Asia*、*The World Digest*を発行した。英文ジャーナリストから出発した頭本は、自分の英語学習法を紹介し、英語教育教材を作成している。

### A 実践的英語学習法

それでは頭本自身、どのような英語学習法を推奨していたのだろうか。

1907（明治40）年に有楽社から発行された『余は

如何にして英語を学びしか 附 如何にして英語を学ぶべきか』で、当時ジャパン・タイムス主筆だった頭本は英語の研究・学習法について提案している。先ず英米人から直接学び発音に慣れるようにすること、書いた英文を外国人から添削してもらうこと、英語で物事を考える習慣をつけること、音読をすること、会話もできるだけ英米人に接して練習すること挙げている。神田乃武も同様で、正確な発音を学んだ人から習うように勧めている<sup>10)</sup>。

また1918(大正7)年に出版された『英語の学び方』には神田乃武、勝俣銓吉郎、岸本能武太、岡倉由三郎、斎藤秀三郎、頭本元貞といった錚々たる英語教育者の英語教育法が掲載されている。この時衆議院議員であった頭本の主張は「実用英語を主とせよ」である。中学1,2年の英語がかなり実用的になってきたが、3,4,5年に進むにつれて実用的な内容が減少し、せっかく実用に慣れた英語の習慣が脅かされてしまうと述べている。そして中等教育と高等教育の連続性の欠如を指摘している<sup>11)</sup>。

## B 『英語時事会話』

上記のように、頭本は会話と時事英語に力点を置く発信型の英語を主張していたが、前述の『ジャパン・タイムス学生号』『ジャパン・タイムス少年号』からも彼の英語学習の理念を窺い知ることができる。『ジャパン・タイムス学生号』の特徴として頭本の執筆による「学生英語会話」と「時事和文英訳」の連載が始まった。編集主幹は社長の頭本、編集顧問はジャパン・タイムス記者のサムスが担当、二人が「時事和文英訳」の厳密な校正を行ったと記されている。そしてこれらが多くの学校で副教材として採用されたとある<sup>12)</sup>。100年以上前に、NIEが教育機関で実践されていた事実が浮かび上がってくる。これらの連載が後に『英語時事会話』『時事英文講義』に結実し出版されるが、時事を扱った頭本ら英文ジャーナリストの精神は後の英語教科書にも受け継がれている。

『英語時事会話』(*English Conversation on Current English*)は1911年に巻ノ一、1912年に巻ノ二、1913年に巻ノ三として「ジャパン・タイムス社出版部」から発行された<sup>13)</sup>。いずれも著者は頭本である。当時日英会話のテキストはたくさん出版されていたが、無味乾燥な内容のものが多かったようである。そこで学生が興味深く学習できることを目的に、前述の「学生英語会話」に訂正・脚注を施し発行したと序文に出版の意図が記されている<sup>14)</sup>。「教師」と「近藤」「斎藤」、後

に「安藤」「大久保」「中村」という男子生徒が加わり会話形式で構成されている。語注と日本語訳、関連単語のリストが併記され独習用に便利な構成となっている<sup>15)</sup>。

内容としては、1911年に亡くなった小村寿太郎の葬儀や彼の功績、12月29日に孫文が臨時大統領に選ばれたこと、1912年1月の中華民国の成立などが挙げられる。同年4月、太平洋上ではタイタニック号が氷山に衝突して沈没、1600名の死者を出した。その年7月30日には明治天皇崩御の後大正と改元された。1911年から12年にかけては、一つの時代が終わるとともに新たな時代の始まりであった。本書は明治末期から大正にかけての激動の二年余りの上記の出来事の他に、アメリカの大統領選、日本の議会制度、選挙制度、トルコ・イタリア戦争、台湾、朝鮮との関係などを英語の対話形式で説明している。今読んででも過去の歴史の一コマをわかりやすく教えてくれる解説書のような印象を受ける。

英語版御用新聞と認識されていたジャパン・タイムスの社長頭本は、若者を洗脳しようと思えばそのような記事を書ける立場にあったと考えられる。当時の状況を肯定的に説明する箇所でも頭本の時代潮流に対する見解が伝わってくる。しかし若い読者にそれを強要することを避けようとする抑制のきいた部分もあり、全体として若者に日本の政治や対外情勢などを知識として伝えようとする意図が感じられる。

「時事」と銘打っているものの、内容は年中行事や諺を用いた日常生活や教訓を扱っている『日英時事会話』(有楽社、1909年)やArthur Lloydによる*Model Translations and Dialogues*(英語研究社、1913年)と比較しても、この『英語時事会話』は時事に特化した分だけ独創性が指摘できよう。

## 4 英語教科書の分析

上記のように、頭本は英文ジャーナリストの職分を時事英語教育にも注いだ、英字新聞と教科書を英語教育の両輪であると認識していたと思われる。『ジャパン・タイムス学生号』は学校では副教材として使用されたが、頭本は学校という公共教育空間で使用される英語教材にも関与し、それらはヘラルド社内で印刷されている。ヘラルド社内には中等教科書出版協会を組織し、株式会社中等教科書出版協会が編集を行い、同じく株式会社中等教科書出版協会が発行所となっているものがほとんどである。発行所の表示に「株式会社」

が欠落した教材もみられるが、それは植字ミスによるものと考えられる。

本章では、出版された教材が集中する1925（大正14）年から1929（昭和4）年に発行された教科書と副教材60点ほどの教材の現物調査を行い、その中から数点を選択し、内容解説とコメントを加えた<sup>16)</sup>。英文法、読本、英作文、副読本に分類し、初版年、定価、臨時定価、総ページ数に加え、著作者及び代表者が①頭本本人によるもの、②株式会社中等教科書出版協会編集部代表頭本元貞であるもの、③株式会社中等教科書出版協会によるものがある。また発行者兼印刷者は①発行者が頭本元貞、印刷者が秋本宗一によるもの、②株式会社中等教科書出版協会編集部代表頭本元貞による2種類の表記が確認できた。

## A 英文法・英作文・読本・副読本

### 1 〈英文法〉<sup>17)</sup>

- 1 *New age easy course; book 1*（大正14年12月5日初版印刷、12月9日初版発行、定価41銭、大正15年度臨時定価70銭、151頁）
- 2 *A higher English grammar*（大正15年9月25日印刷、29日発行、定価29銭、146頁）
- 3 *Girl's English grammar* 『女子用英文法』（大正15年1月18日初版印刷、22日初版発行、定価23銭、103頁）

1, 2は旧制中学対象の男子又は一般の教材で、ページ数からも分かるように量的にも多く、内容もレベルが高く充実している。1の*New age easy course; book 1*は、文法・英作文のテキストとしては一般的な構成である。Contentsと本文、Appendix, Romaji, Spellings, Key to the soundsが続く。イギリスの典型的な風景としてロンドン橋の写真が載っている。ちなみに同書book 2にはロンドン橋を意識して日本の二重橋の写真が載せてある。

1のLesson 33 (pp.153-139)の感嘆文の英作文exerciseには、女性言葉の使用が見られるので、この教科書は男子・女子の全般を対象にしていたことが分かる。

- 1 何と今日はよい天気ですこと。
- 2 まあ何と太陽がきらきら (brightly) 照りますこと。
- 3 まあ君は何という運の強い (lucky) 人ですこと。
- 4 まあ何とよい (beautiful) 月ですこと。あの雁をご覧なさい。
- 5 浜辺に (on the seashore) にまあ人が大勢いますこと。

2には‘He died a heroic death. How wonderful Death and his brother Sleep are!’と記載があり、戦争で亡くなった人を美化する表現が見られる。またpossession caseの説明中、例文に‘This is Tokutomi’s latest novel.’とあるのは、頭本の友人（同業者）徳富蘇峰の弟蘆花のことであろう。

3の女子用の教科書は紙質も劣り、印刷も斜めに多少ずれており、安価な装丁である。これら3冊は著作及び代表者は中等教科書出版協会、発行兼発行印刷者は（株）中等教科書出版協会編集部代表頭本元貞となっている。

### 2 〈読本〉<sup>18)</sup>

- 1 *New age side readers; book 2*（大正14年10月15日初版印刷、10月19日初版発行、定価43銭、大正15年度臨時定価73銭、159頁）
- 2 *The primary school readers; book 1*（大正14年11月17日初版印刷、11月20日初版発行、定価43銭、大正15年度臨時定価39銭、114頁）
- 3 *The primary school readers; book 2*（大正14年11月17日初版印刷、11月20日初版発行、定価32銭、大正15年度臨時定価54銭、131頁）
- 4 *The youth readers; book 1*（大正14年12月4日初版印刷、12月8日初版発行、定価33銭、大正15年度臨時定価56銭、114頁）
- 5 *The youth readers; book 2*（大正14年12月4日初版印刷、12月8日初版発行、定価35銭、大正15年度臨時定価60銭、131頁）
- 6 *The youth readers; book 3*（大正14年12月4日初版印刷、12月8日初版発行、定価37銭、大正15年度臨時定価63銭、142頁）

1は著作者も発行者も頭本本人であり、2～6読本は著作者兼代表者、発行者が頭本、印刷者は秋本宗市となっている。

*New age side readers*はbook 1～3までであるが、ここではbook 2を検討したい。book 2の見返しに掲載されている挿絵が目を惹く。ウェストミンスター寺院の内部に広げられたユニオンジャックの旗の上に無名戦士の墓石である。それは何を意図しているのか。死者を弔う意図なのか、それとも戦意高揚を狙ったものなのか。

以下にそのコンテンツを挙げよう。

Contents: Lesson 1～27

- 1 Travelling
- 2 Play and Health



- 3 Wireless Messages
  - 4 Work and Play
  - 5 Success in Life
  - 6 Healthful Habits
  - 7 The First English Printer
  - 8 English Home Life
  - 9 Thrift
  - 10 Oxford and Cambridge
  - 11 Don't
  - 12 Drink Plenty of Pure Water
  - 13 The English Character
  - 14 Captain Scott's Last Message
  - 15 Work
  - 16 The Earthquake and the Grate Wave
  - 17 Breathing Fresh Air
  - 18 Industry
  - 19 Marco Polo
  - 20 Tabacco Is Not Your Friend
  - 21 My Mother's Grave
  - 22 Two Great Inventors
  - 23 Concentrated Energy
  - 24 Sir Isaac Newton and His Discovery
  - 25 How and What to Read
  - 26 Mount Wilson Observatory and the Spectroscope
  - 27 The Last Journey of the Unknown Soldier
- Appendix: Travelling on the Water

無線電信・電話の発明による日常生活の利便性の向上、ラジオ局の開設によりニュースや音楽番組が身近なものになったこと、直径60インチの分光器など科学技術の発展を扱っている。そしてLesson 27では最初の挿絵と円環を結び形で、次のように人間の命の尊さが示されている。英国王ジョージ5世が喪主となり1920年11月10日にウェストミンスター寺院で執り行われた無名兵士の葬儀の描写がある。その兵士は恐らく自分が何のために戦っていたのかも十分理解していなかったのではないかと、世界大戦で息子や夫を戦争で失ったすべての女性たちは、勇敢に戦い名誉ある死を遂げたこの見ず知らずの若者の無残な亡骸に自分の愛するひとたちの死を重ね合わせたことだろうと結論している。

電波による情報発信は、芝にある愛宕山で開局した放送局の写真とラジオ番組予定表を載せている。これはメディア人頭本にとっては欠かすことのできないテーマだったと思われる。

Radio Programme To-day : 1. Lecture. "The Home for Children," Mr. Isoo Abe. 2. Chikuzen-Biwa (Japanese Lute) —"Gishi No Honkai," Miss Kyokusho Tominaga. 3. Orchestra. By the Toyama Military School Band under the direction of Lieutenant S. Hirano. "Snow Bells," "Saxophone Solo," "Cuckoo and Cricket," "Marching train." The programme starts from 7:15 p.m.

*The primary school readers*には book 1 と book 2 があるが、*The Youth Reader; book 1, The Youth Reader; book 2*の2冊と総頁数も内容もまったく同一の教科書だということは非常に興味深い。教科書名と金額を変え、発行日をずらして同じ教科書が同じ出版社から出された事実に驚かされる。このようなことが当時は認可されていたのか、同じような事例があるのかについては今後の研究課題となる。*The primary school readers*では book 1, book 2 までの存在を確認したが、いずれも国定期尋常小学校、国定期高等小学校の生徒が対象であった。*The Youth Reader*は book 1, book 2, book 3 が発行されているので、恐らく *The primary school readers* も book 3 が発行されたのではないかと推察される。

*The Youth Reader; book 1*は旧制中学校を対象としているが、子供向けの内容で、ローマ字で書かれた日本語を英訳するドリルやなぞなぞは面白い。Lesson 1~48 まであり巻末にはヘボン式のローマ字表がついている。

その一例を挙げると、

Lesson 38 (82頁) Translate into English.

1. Hitori no seinen ga shinbun o yonde iru.
  2. Ano rojin wa megane nashi de yomi kaki ga dekiru.
- Riddle:
1. People live in me. I have a roof. I have a window. I am a \_\_\_\_\_.
  2. I am covered with hair. I have four legs and a tail. I say "Bow-wow." I am a \_\_\_\_\_.
  3. I am white. I am good drink. The cows gives me to you. I am \_\_\_\_\_.

*The Youth Reader; book 2*はロビンソン・クルーソーやイソップ寓話からの話が多い。The Sun and the Wind では比較級、The Wisest Bird では最上級が説明されている。The Ant and the Dove は鳩に助けられた蟻が今度は鳩を助ける話である。How the Crow Drank Water はのどが渇いたカラスがピッチャーに入っている水を飲

もうとするが、水が少ないのでくちばしが届かない。考えたカラスは小石をピッチャーに入れていく。The water came to the top, and the crow could drink it. これは Where there is a will, there is a way. の教訓話である。最も笑える教訓物は The Bear and the Travellers であろう。親友の二人の男が旅をする。その途中で熊に襲われ、一人は木の上ののぼり、もう一人は地面に横たわる。木の上の男が、地面に倒れている男に何を言っているのかを聞いた。返ってきた返事は皮肉が効いている。“He told me,” replied the other, “Never again to travel with a friend who deserts me in a time of danger.” また *New age side readers; book 2* に使われたラジオ放送局の写真がここでも用いられている。The Saving Bank では安全で利子がつく銀行預金を勧めており、生活に促した内容で教育効果を狙っている。

賃貸住宅の広告や日記の書き方、時事ニュースの学習は頭本らしい特徴が認められよう。

#### Advertisement :

For Rent—Tokyo Two-story foreign style house, furnished, 7 rooms with garden, in Azabu. Rent ¥200.

Deposit ¥1000. Box no. 104, Japan Times, Tokyo

これは連絡先がジャパン・タイムスとあり、頭本が住む麻布の自宅を貸すイメージである。

#### From Ned's Diary :

Feb. 25<sup>th</sup>. Sunday. Clear and cold. Went to church this morning with father and mother. In the evening Cousin James came to visit us.

Feb. 26<sup>th</sup>. Monday. Fair and mild.

Feb. 27<sup>th</sup>. Cloudy and windy.

Feb. 28<sup>th</sup>. Snow storm all day.

March 1<sup>st</sup>. Bright day after the snow storm.

March 2<sup>nd</sup>. Fair. Birthday.

March 3<sup>rd</sup>. Very cold. Snowed all morning, but at noon it began to clear.

#### News :

The reconstruction of Yokohama harbor which was destroyed by the earthquake of September 1, 1923, is now completed.

The battleship Mikasa is to be preserved as a memorial of the battle of the Japan Sea.

The ship is now lying in Yokohama Port.

The Seihoku Primary school at Aoyama was destroyed by fire last night. The loss is put at 200,000 yen.

*The Youth Reader; book3* も book 2 と同様に教訓物が扱われている。例えば The Hidden Treasure は、怠けもの息子たちを持つ父親が、遺言で宝物を土の中に埋めたから、そこを掘るようと遺す。子供たちは熱心にその土地を掘っていくが何も見つからない。ある時子供たちは気づく、そこには何も無いということに。荒地は耕され畑になった。宝物とは畑のことだったのだ。巻末には Punctuation Marks の種類次のように説明されている。

. full stop / , comma / ; Semi-colon / : Colon / —Dash / ‘ Apostrophe / - Hyphen /

“ ” Quotation mark / ! Exclamation mark

句読点の説明がある教科書は管見の限りでは、珍しいと考えられる。

この教科書でも頭本は新聞、主筆や編集者、新聞記者、印刷者、広告などを説明し、メディア人としての本領を発揮している。毎日新聞を読むと世界中と繋がることのできることを、現在学学習している言語の新聞を読むことを推奨している。

#### 3 〈英作文〉<sup>19)</sup>

1 *A first course in English composition; book 2* (昭和 2 年 9 月 15 日初版印刷, 9 月 20 日初版発行, 定価 37 銭, 154 頁)

2 *Further course in English composition; book 3* (昭和 3 年 12 月 3 日印刷, 12 月 6 日発行, 定価 34 銭, 昭和 4 年臨時定価 57 銭, 125 頁)

この 2 冊の英作文の教材は著作者が中等教科書出版協会編輯部で、頭本元貞が代表となり、校閲をイギリス人の Frank H. Lee が担当している。

*A first course in English composition* は book 1 と book 2 しか確認できなかった。*Further course in English composition* は book 1 がないが、book 3 があるので、*A first course in English composition* には book 3 も発行されたはずである。どちらも内容的にはレベルが高く、高校でも使用可能である。

*Further course in English composition; book 3* はこの book 2 と同様に各レッスンに日本文の英訳指示、文法的注意事項と「記憶すべき語句」、Exercise にも同様に英語の使用語句が載せてあり、一般的な英作文の教科書ではある。しかし Will you ~? 誘引を表す例として以下のように「候文」を載せている。他の教科書には見られない意外性が面白い。

「御相談申上度儀有之候に付 次の土曜日午後三時

四時の間に拙宅へ御来臨被下度候。』

‘I have something to talk over with you. Will you please come to my house on Saturday next between three and four o'clock?’ Grammatical notesにはWill you …? は誘引を表すことがあると説明し、Will you come with us? と例文を示している。また「記憶すべき語句」としてto talk over withを注に入れてある。このように候文を使うことはかなり稀有な事例だと思われる。

Leeは中等教科書出版協会から*First steps in English composition*（大正14年12月）を、*Further steps in English composition*（大正15年10月）を発行している。Leeがネイティブとして頭本の教科書編集とともに携わっていたことが確認される。

#### 4 〈副読本〉<sup>20)</sup>

- 1 *Biographical stories*（昭和3年6月1日印刷、6月5日発行、定価48銭、183頁）
- 2 *Sinbad the sailor*（昭和2年8月27日初版印刷、8月30日初版発行、定価38銭、昭和2年度臨時定価87銭、148頁）
- 3 *Gulliver's travels*（大正15年12月19日印刷、12月21日発行、定価39銭、大正16年度臨時定価66銭、152頁）
- 4 *Round the world with father*『世界一周』（昭和2年5月10日印刷5月15日発行、定価51銭、昭和2年度臨時定価87銭、215頁）

これらの副読本のうち2, 3は明治期から馴染み深い読み物で、いわば副読本の定番と言っても過言ではない。1の*Biographical stories*は原作者ナサニエル・ホーソンが伝記体で執筆した教訓物で、Edward Templeという目が不自由な少年を慰める為に父親が語りだした物語、という筋立てになっている。①英国のThe Royal Academy（王室美術院）の総裁にして米国の画家でもあるBenjamin West ②英国の自然学者Sir Isaac Newton ③英国18世紀文壇の覇者、英語辞典の著者Samuel Johnson ④Benjamin Franklin ⑤スウェーデンの女王の位を捨て男装して欧州全国の王室を訪問、外遊9年贅沢な生活と奇抜な行動で世人の耳目を集めた男性的婦人Queen Christinaの幼年時代の逸話が収められている。

ホーソンのこの物語は明治期から英語副読本検定教科書教材として使用されていた。例えば明治32年11月には鹿島長次郎が興文社から、明治43年には鍾美堂、明治45年には斎藤秀三郎が執筆し日英社から出版されている。大正4年には金刺源次が金刺芳流堂から、

大正10年に大日本文明協会が文明書院から、大正12年に佐川春水が尚分堂から出版されている<sup>21)</sup>。昭和3年発行の本書の著作者は中等教科書出版協会編集部代表頭本元貞である。筆者は東書文庫所蔵、愛知教育大学所蔵、国会図書館所蔵の3冊を調査したが、昭和3年度の臨時定価は80銭、昭和5年度版になると78銭となっている。

本稿では考察の対象とはしなかったが、*Aesop's fables*<sup>22)</sup>や*Peter Parley's Universal History*もこの出版協会から出版されており、これらは当時の教科書の売れ筋だったことが分かる。

4の*Round the world with father*は外国からの出典ものではない為、頭本を始めとする出版編集部の創作と推定される。『世界一周』の話だが、あるイギリス人男性旅行者が旅先のフランス、エジプト、中国、日本、カナダから本国の子供たちにあてて送った手紙というスタイルをとっている。父親が旅先で見聞した現地の人々の風俗や習慣などを描写し、それを家族に送っている。KateとMayという小学生の姉妹とTomという兄が、父からの手紙で世界一周をした気分になるという筋書きである。

例えば、中国では男性の髪型を説明している。長く太いpigtailの人は尊敬を集め、犯罪者は獄中に入る時にpigtailを切られ、出所する際は鬢のpigtailを買ってつけるという。また中国の金持ちの婦人は、足がとても小さいことを誇っている。纏足は非常につらいので、‘The Chinese have a saying: “Every pair of bound feet costs a bath of tears.”’<sup>23)</sup>ということだ。

日本での経験は特に印象深かったと記している。霊峰富士山に感嘆し、ひな祭りや端午の節句を讃美している。日本人が知力に優れていること、美術を愛する心にも敬意を表している。

Most of the people in the East are very backward. They have stood still while the people of the West have gone forward. Not so the Japanese. They have learnt everything that the West can teach them. You will see in Japan all the things on which we pride ourselves.

The Japanese are first-rate sailors. Some of their captains learnt to be sailors on board our warships.

They are also fine soldiers. You know no many years ago they beat the Russians both by land and by sea.

I like the Japanese better than any other people that I have met in the East. Many of them still wear the dress of olden days, and keep to their simple and pretty ways. Their

country is beautiful, and they love beautiful things.<sup>24)</sup>

日本はほかのアジア諸国とは異なり、西欧の文化を取り入れいち早く近代化をとげたことや日露戦争の勝利に言及し、自分たちイギリス人が誇れるものを日本人がすべて体現していると称賛している。英国人の言葉をかりて、美しい日本、美を愛する日本人を讃えていると言っても良い。

ただ日本滞在中の記述では次のような気になる箇所も見られる。日本人は勇敢で多忙な生活をしており、極東のブリトン人だと表現し、'Every boy in Japan wishes to be either a soldier or a sailor when he grows up. Every tiny little mites play with flags and drums and little guns. When the boys are older, they are taught to be brave, and to die if need be for their country.'<sup>25)</sup>と日本の少年たちの戦時下の日常と子供たちの今後の在るべき姿が描かれている。教科書の副教材を通して、日本の軍国少年育成と、求められれば国家のために潔く死を選ぶことへの刷り込みが意図されているのだろうか。

なおこの読本は著者エリック・エス・ベルと堀英四郎が*A Trip round the World*と改題して1933(昭和8)年中等教科書出版協会から発行している。

## B *Girl's English grammar. New age easy course; book 1. A new short English grammar*

4章1の英文法の教科書で*Girl's English grammar*について簡単な説明をした。この教科書は前述の通り紙質や印刷も雑で、ソフトカバーでページ数は101頁とかなり少ない。読本や他の英作文、英文法ではハードカバーの装丁が多くを占めていた。ソフトカバーの装丁は副読本では一般的であったが、それを鑑みても女子用の教科書の粗雑さが明らかである。先の*New age easy course; book 1*では女性言葉を使った英作文がわずかに見られた。これはたとえ数行しか記述されていなくとも男子・女子を問わず中学生一般を対象にしていたことが分かる。

*New age easy course; book 1*と*Girl's English grammar*のContents、ページ数については、前者はLesson35までありAppendixのローマ字表や発音記号を加えると151頁、後者はLesson 17の接続詞までで103頁にすぎず、前者の3分の2の頁数である。後者は各単元とも短い文法説明と練習問題から成る単純な構成である。挿絵が豊富な前者に比べ、女子用なのにも拘わらず、他の中等教科書出版協会発行の教科書に多用されている動物の幾何学模様が使われている。女

子用ならもう少しそれらしい工夫があってもよいのではないかとの印象を覚える。

幸運にも筆者は*Girl's English grammar*に酷似した教科書を入手することができた。それが*A new short English grammar*<sup>26)</sup>である。本書は昭和4年9月に中等教科書出版協会編輯部代表者頭本元貞の著作名で発行された。同年12月に訂正再版が定価27銭で発行、昭和5年度の臨時定価が44銭と記されている。Lesson 25までであるが、その中でLesson17までが*Girl's English grammar*とほぼ同一の内容であることが判明した。これも*Girl's English grammar*と同様にソフトカバー仕様で頁数は116頁、AppendixにCapital letterの使い方と句読法の詳細な説明があるのがとても親切な作りだと言ってよい。このテキストに載った挿絵は、*Girl's English grammar*で使われた幾何学模様からおしゃれなバラの花と金魚が泳いでいる水槽に変わった。裏表紙には「澤田」と印鑑が押してあるが、生徒が男子なのか女子なのかは不明だ。ただ、教科書に挿入である日めくりカレンダーの一枚<sup>27)</sup>に名詞や助動詞が筆記体で書かれており、その字を見ると、恐らく男子生徒が使っていたようである。

Lesson 17までの両教科書の大まかな相違点を挙げると、*Girl's English grammar*では脚注での文法的な説明が著しく少ないことが挙げられる。また細かい点では、副詞の比較級、自動詞、他動詞の説明がないこと、不定動詞、分詞、動名詞の説明が少ないものの、助動詞についてはページ数を割いている。接続詞の項までで終わっている本書に対して、*A new short English grammar*はそこで掲載できなかったものをLesson18から載せ、脚注も豊富でかつAppendixも充実している。本書のMarks of punctuationは先に述べた*The Youth Reader; book 3*よりもはるかに詳細でかつ事例に富んでおり、教科書の総体としてより完成度が高いものだといえるだろう。

このように2冊の教科書を比較してみると女子用の教科書の物足りなさを感じられる。中等教科書出版協会から出ている女子学生向け英語教材は、この大正15年発行のもの以外には見当たらない。大正期に発行された女学校用の検定教科書としては、長澤英一郎著*Girl's school grammar*(大正15年8月発行)と小泉卓蔵著*School=Girl's English course*(全5巻)(大正15年10月発行)、そしてこの*Girl's English grammar*の3点だけであった<sup>28)</sup>。小泉の教科書の一巻ずつの頁数と内容は分からないが、全5巻ということでレベルの高い教科書だったのではないかと推測される。そうすると実際に女子



中等教育で一般的に使用される英文法教科書は *Girl's school grammar* と *Girl's English grammar* の 2 種類に限られていたと考えられる。

ちなみに昭和期（戦前）では、女学校用の検定教科書は読本の発行こそ多かったが、英文法や英作文は大正期と同様に少ないことが分かる。中等教科書出版協会からも *Girl's grammar and composition*（全 2 巻、昭和 9 年発行）と *Girl's easy English course*（前 2 巻、昭和 3 年発行）があり、発行教科書の種類が少ない中では健闘しているように思われる<sup>29)</sup>。

昭和15年 8 月末に文部省は教科目ごとに 5 種の教科書に限定し、10 月には検定済教科書の 5 種を選定し発表した。高等女学校英作文は 3 冊だけの選定だったが、その中に中等教科書出版協会編集部編の *Girl's grammar and composition* も入っている<sup>30)</sup>。

中等教科書出版協会にとって英文法や英作文の教科書発行には競争手が少なかったことが認められる。その分販路は安定して、収入源につながったと考えられる。

大正 8 年の改正中学校令を見ると、男子に必須の外国語の授業数を、第 1 学年から第 5 学年までそれぞれ 6, 7, 7, 5, 5 時間と指定した。一方、大正 9 年の改正高等女学校令で女子学生の外国語時間数をすべて 3 時間に決め、4 時間の裁縫の時間と比較しても実学重視の傾向が理解されよう<sup>31)</sup>。女子英語教育が冷遇されていたのは明白である。

### C 臨時定価

最後に臨時定価について少しだけ触れたい。教科書の奥付に記載されている臨時定価とは何かということである。教科書ページ数にもよるが、臨時定価は当初の定価に概ね 25 銭から 35 銭の金額が上積みされている。これは当時のほかの教科書にも共通する点であるが、金額はどのような根拠で設定されたのか。時勢を反映していたのか。上積みされた価格は出版社の資金にのみ留まったのか、対外膨張政策をなんらかの方法で支える手段として国家予算に吸収されたのか、など妄想も働いた。

『教科書の編纂・発行等教科書制度の変遷に関する調査研究』（平成 9 年 3 月）がその疑問を解消してくれた<sup>32)</sup>。この調査によると、1915（大正 4）年度に国定教科書の定価は 5 厘の端数が切り捨てられ定価が低廉化したとある。その後第一次世界大戦による好景気が賃金の高騰や物価騰貴を招き、特に用紙価格が騰貴したため、1919（大正 8）年度から教科書に「臨

時定価」なるものが定められたと説明している。さらに「臨時定価」の最初の文部省告示第 188 号（大正 7 年 8 月 2 日）では、使用中の全国定教科書役 100 種類について「臨時定価金 4 銭」の教科書、「5 銭」「6 銭」というように金額の低い者から順に教科書名を挙げて告示していると述べている<sup>33)</sup>。

また「臨時定価」は用紙価格の変動などで毎年のようにめまぐるしく改訂されたということである。その後 1931（昭和 6）年度を最後に小学校教科書の「臨時定価」は廃止され、1939（昭和 14）年度から再開されたということである<sup>34)</sup>。

上記の調査の対象は、修身、読本・国語、国史、地理、算術・算数、理科の教科書であり、英語教科書が対象から外れているのが非常に残念である。例えば東京修文館から 1926（大正 15 年）に発行された青木常雄による *Aoki's Concise English Grammar revised edition*（東書文庫所蔵）は 36 銭だったものが、大正 16 年度の臨時定価では 57 銭と跳ね上がっている。

1925 年 1 月中等教科書出版協会発行の『標準算術教科書<sup>35)</sup>』（実業学校用）は 62 銭だったものが、同じ年度で 1 円 5 銭の金額になっている。1 円の教科書というのはかなり高額である。中等教科書出版協会から出版された英語教科書のみならず、すべての教科書の価格上昇は一般家庭にとって大きな負担だったと思われる。

### 5 おわりに

本稿において、筆者は主として 1925（大正 14）年から 1928（昭和 3）年にかけて、頭本自身の著作による教科書、頭本が代表となった中等教科書出版協会編集による教科書の内容を調査し分析した。Contents だけを見ると一般的な教科書との印象を受けるが、内容を詳細に見ていくとニュースや広告、ラジオの番組表や日記の書き方など実用的な側面が教材として織り込まれ、頭本の独自性が認められた。また女子用の教科書は粗雑な印刷が印象的であった。

いずれも「ヘラルド・オヴ・エシア」（ヘラルド社）で印刷されていたが、何部印刷されたのか、何処でどのくらい使用されたのかは追跡していないため不明である。しかし積極的に教科書作成がなされたという事実は、本稿で扱った教科書から見ても明らかである。

1923 年の関東大震災でヘラルド社の建物は幸にも損壊を免れたが、工場は大きな被害を受け活字台は総て倒潰した。幾十万という活字が減茶苦茶に床の上に

散乱し足の踏み場もないくらいだったと、同社発行の学生向け英語雑誌 *Eigo Daigaku: the Herald of Asia College Edition*<sup>36)</sup> の社告にその情況が記されている。経営を立て直す途上にあったため、積極的に編集・印刷・出版が行われていたと推察される。

ハロルド・パーマーとの交友関係も重要であった。関東大震災で被害を受けた英語教育研究所の音声活字はヘラルド社に委託・分譲された。*The Bulletin of the Institute for Research in English Teaching* や Palmer の教科書もヘラルド社で印刷・発行されている。筆者所有の *Conversational English and How to Learn it* (『英会話上達法』) は大正14年3月7日発行された。これは定価1円60銭で、訳者大村益荒、発行兼印刷人は秋本宗市、印刷所はヘラルド社印刷部、発行所はヘラルド社となっている。

人脈と有能な執筆者、印刷所などの要素がそろったからこそ積極的な出版活動が可能となったのである。

1925年ころの頭本はかなり多忙な日々を過ごしていた。いわゆる「排日移民法」の影響により、日米の軋轢を打開する為にさまざまな活動を行っている。1925年にハワイで開催された「太平洋問題調査会」の国際会議にはメディア人として出席し、1928年7月にはワシントン大学、8月にはマサチューセッツのウィリアムズ大学で、日本の国策理解のために遊説して廻っている。対外的な活動で忙しかったからだろうか、1925年に自ら教科書を執筆して以降、個人名での教科書は執筆されず、中等教科書出版協会の編集部代表という立場に変わっている。

日本の英語教育において、神田乃武、斎藤秀三郎、岡倉由三郎、勝俣銓吉などの著名な教育者の中にいて、「英文報国」をモットーに国策発信に邁進した頭本元貞は、英語教育の発展を追求した一人でもあった。彼の活動は英字新聞、英語雑誌発行に留まらず、英語教科書の発信にも大きな足跡を残したと言えるだろう。

#### 【頭本の略年譜：筆者作成<sup>37)</sup>】

1863年1月23日(文久2年12月4日)

頭本(かしらもと)保五郎(平民)の長男として鳥取県日野郡黒坂町に生まれた。幼名は元太郎(もとたろう)。

1874年(明治7) 5月黒坂宿第四百番小学校卒業。

1875年(明治8) 鳥取中学校(鳥取変則中学校)入学。

1877年(明治10)

愛知県中学校に転じて寄宿舎生活に入る。

1878年(明治11) 東京大学予備門に入学。

1880年(明治13)

武信由太郎と共に札幌農学校第4期生として入学。新渡戸は2期(1877から1881まで在籍)。1879年(明治12年)は官費留學生が定員50名をほぼ満たしたため学生を入れなかった。

1884年(明治17) 札幌農学校卒業。

1885年(明治18)

Japan Mail記者、伊藤博文秘書兼務。記者時代に頭本の読み方を(くずもと)に変えた。

1896年(明治29)

伊藤博文内閣総辞職と共に秘書官を辞す。96年から97年にかけて、アメリカ、ヨーロッパを視察。

1897年(明治30) 3月22日

同郷の先輩山田季治(社長)、武信由太郎(副主筆)、田中美重蔵(支配人兼工場長)等と共に英字新聞 *The Japan Times* を創刊、主筆となる。山田の従妹は福沢諭吉の妻。

1898年(明治31)

伊藤博文が第三次内閣を組織すると共に再び秘書官となる。

4月15日

武信由太郎、勝俣銓吉郎等と『青年』(のちの『英語青年』 *The Rising Generation*) を発刊。

1902年(明治35) ~ 03年

欧米漫遊後伊藤博文に随行して満州・朝鮮を巡る。

1906年(明治39)

伊藤博文が韓国統監となるや、勅任待遇の幕僚として京城に赴任。*Seoul Press* を買収して社長兼主筆となる。

1909年(明治42)

ニューヨークに赴き、東洋通信社 *Oriental Information Bureau* を創設、*The Oriental Review* を発行。

10月26日 伊藤博文暗殺される。

1911年(明治44) 1月~1914年(大正3) 4月

Japan Times社長。

1914年(大正3)

ロイター通信員ジョン・ラッセル・ケネディ(John Russel Kennedy)がJapan Timesの経営者となり、頭本はJapan Timesを去る。同年雑誌社「ヘラルド・オヴ・エシア(=ヘラルド社)」を起こす。英語研究雑誌『ジャパン・タイム

- ス学生号 (*Japan Times Student Edition*)』  
や『ジャパン・タイムス少年号 (*Youth*)』(明  
治45年ジャパニオン・タイムス社創刊)を出版。
- 1916年(大正5) 3月25日  
ヘラルド社から週刊雑誌『ヘラルド・オヴ・  
エシア (*The Herald of Asia*)』を創刊する。
- 1917年(大正6)  
鳥取県日野郡から立候補、一位で当選、政  
友会代議士となる(1921年まで)。
- 1918年(大正7)  
12月から1919年2月まで、日本とシベリア  
を往復。4月より対外宣伝のため派遣軍司令  
部弘報局長としてウラジオストックに滞在。
- 1921年(大正10)  
渋沢栄一に随行。ホノルルで開催された第  
2回世界新聞大会で講演。  
同年、ワシントン軍縮会議に出席。翌年帰国。
- 1923年(大正12)  
『ジャパン・タイムス学生号』を『英語大学』、  
『ジャパン・タイムス少年号』を『英語専門』  
と改題し、新たに『英語中学』を創刊した。  
しかし、9月1日の関東大震災で『ヘラルド・  
オヴ・エシア』と上記三英語雑誌も廃刊。
- 1924年(大正13) 5月 アメリカで排日移民法制定。
- 1925年(大正14)  
第一回太平洋問題調査会ホノルル会議に「ヘ  
ラルド・オヴ・エシア」主幹として出席。米  
国の排日移民法と中国の不平等条約が議題。
- 1925年(大正14) から1933年(昭和8)にかけてヘ  
ラルド社内で起こした(株)中等教科書出版  
協会から*New age easy course*, *New age side  
readers*, *The primary school readers*, *The  
youth readers*, などの英語教材を執筆、編集、  
印刷、発行。
- 1926年(大正15) 11月  
私家版 *Japan and Pan-Asiatic Movement*  
(Herald of Asia pressで印刷) 発行(国際連盟  
関係の会議でのスピーチ)。
- 1929年(昭和4)  
第三回太平洋問題調査会京都会議に「ヘラ  
ルド・オヴ・エシア」主幹として出席。満  
州問題が議題。
- 1931年(昭和6) 2月  
*Japan and the World*を *Herald English  
Series*の一環として出版。
- 10月  
*The Herald of Asia Library of Contemporary  
History*, Nos 1-4 出版。
- 1932年(昭和7) 4月から10月  
*The Herald of Asia Library of Contemporary  
History*, Nos 5-9 出版。
- 7月  
*Sino-Japanese Entanglements*, 1931-1932 出  
版。
- 1939年(昭和14)  
牛込区原町の武信邸に再度「ヘラルド雑誌  
社」を起こし、英語雑誌 *World Digest* を創  
刊したが1940年5月以降廃刊と推測される。
- 1943年(昭和18) 2月15日  
麻布区本村町118の自宅で永眠。満80歳。

### (Bibliography)

#### 第一次資料

- 英学会編輯局編輯『余は如何にして英語を学びしか 附 如何にし  
て英語を学ぶべきか』有楽社、1907年。  
『英語時事会話 巻ノ一』ジャパニオン・タイムス社出版局、1911年12  
月。  
*Eigo Daigaku: The Herald of Asia College Edition*, 1924年1月1  
日号。  
『ジャパニオン・タイムス学生号』Vol.1, No.6. 明治44年11月15日号。  
*The Bulletin of the Institute for Research in English Teaching*,  
no.5, October-November, 1924.  
各種英語教科書  
DB:和歌山大学江利川春雄代表による「明治以降外国語教科書デー  
タベース」「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」

#### 第二次資料

- 阿部俊子「頭本元貞」『学苑』第15巻1号、1953年1月。  
伊村元道『パーマーと日本の英語教育』大修館書店、1997年。  
伊村元道・若林俊輔『英語教育の歩み—変遷と明日への提言』中教  
出版、1975年。  
伊村元道『日本の英語教育200年』大修館書店、2003年。  
江利川春雄『近代日本の英語科教育史—職業系諸学校による英語教  
育の大衆化課程』東信堂、2006年。  
江利川春雄『英語と日本軍』NHK出版、2016年。  
大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編『英語教育史資料』東京法令出版、  
1980年。  
川口康子「郷土の英学先駆者—頭本元貞(1)—」『鳥取女子短期大学研  
究紀要』第15号、1986年。  
川口康子「郷土の英学先駆者—頭本元貞(2)—」『鳥取女子短期大学研

- 究紀要』第16号, 1987年。
- 小篠敏明・江利川春雄『英語教科書の歴史的研究』辞游社, 2004年。
- 渋谷新平『英語の学び方』大阪屋号書店, 1918年。
- 白山映子「頭本元貞と太平洋問題調査会」『近代日本研究』慶應義塾大学福沢研究センター, 2008年。
- 中村久久二代表『教科書の編纂・発行等教科書制度の変遷に関する調査研究』平成7年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究B(1)研究成果報告書, 1997年。
- 松永智子「頭本元貞における発信型英語メディアの軌跡」『教育史フォーラム』第5号, 2010年。
- 松永智子'The role of English media in modern japan: Through the history of English-language newspapers issued by Zumoto Motosada' *Longlife education and library*, 京都大学, 2010年。
- 松永(白戸)智子「近代日本における英字新聞のメディア論的研究—ジャパン・タイムスを中心に」2013年, 京都大学学位論文。

## 注

- 1) 先行研究としては頭本の評伝を扱った, 阿部俊子「頭本元貞」『学苑』第15巻1号, 1953年1月, 川口康子「郷土の英学先駆者—頭本元貞(1)—」『鳥取女子短期大学研究紀要』第15号, 1986年, 「郷土の英学先駆者—頭本元貞(2)—」『鳥取女子短期大学研究紀要』第16号, 1987年がある。阿部論文は典拠とされる諸資料の掲載がないが, 卒業論文として著した「頭本元貞」は優秀な論文として『学苑』に掲載されたようである。旧聞に属するが, 筆者は2003年9月「日本英学史学会」例会で「頭本元貞と『英語時事会話』」と題して口頭発表を行った。そのハンドアウトを当時昭和女子大学名誉教授であった佐々木満子先生(故人)にお渡ししたところ, 佐々木先生が阿部論文を『学苑』に掲載する際に論文チェックを担当されたとのことであった。ちなみに佐々木先生は『近代文学史料研究』の『上田敏』を担当された。また白山は2008年7月15日開催のメディア史研究会(於:東京経済大学)で「国策発信メディア人頭本元貞—第三回太平洋問題調査会を中心に—」と題して口頭発表を行った。その際に研究内容をまとめたハンドアウトを配布した。
- 2) 松永智子「頭本元貞における発信型英語メディアの軌跡」『教育史フォーラム』第5号, 2010年。松永(白戸)智子「近代日本における英字新聞のメディア論的研究—ジャパン・タイムスを中心に」(2013年, 京都大学学位論文)。この松永論文2点には, 筆者が作成・配布した資料(2008年7月15日, メディア史研究会で発表)を出典の記載がないまま転載している箇所が多数あった。
- 3) *Lifelong education and libraries* 所収。京都大学, 2010年。
- 4) 白山映子「頭本元貞と太平洋問題調査会」(『近代日本研究』第25巻, 慶應義塾福沢研究センター, 2008年)。
- 5) (注1)で指摘した阿部論文には坂本由五郎が頭本について触れた回想が記載されている。坂本は, 中等教員の会議に際して, 議事の進行や意見のとりまとめに手腕を揮い, 巧みに会議の運営を行ったと, 頭本の非凡な才能に敬服したという。この坂本由五郎は, 筆者が所属する日本英学史学会の創立者の一人であり, 昭和女子大学第4代学長である。
- 6) 前掲, 注3)を参照のこと。
- 7) *The Bulletin of the Institute for Research in English Teaching*, no.5, October-November, 1924. pp.14-15.及び伊村元道『パーマーと日本の英語教育』大修館書店, 1997年。78-79頁を参照。
- 8) 同上, 伊村, pp.70-82.
- 9) たけのぶよしたろう, 鳥取県気高郡潮津村出身, 頭本より一年早く1876年愛知県中学校に入学。札幌農学校卒業後中学校教員を経て「ジャパン・メール」の社員となる。『青年』(*The Rising Generation*, 後に『英語青年』となった)の創始者であり, 『武信和英大辞典』で知られる。のち早稲田大学教授となる。『英語青年』は2009年3月号を以って休刊。4月号からオンラインマガジン『Web 英語青年』となったが, 2013年3月をもって休刊となった。
- 10) 英学会編輯局編輯『余は如何にして英語を学びしか 附 如何にして英語を学ぶべきか』有楽社, 1907年, pp.9-13.
- 11) 渋谷新平『英語の学び方』大阪屋号書店, 1918年, pp.365-372.
- 12) 『ジャパン・タイムス学生号』Vol.1, No.6.明治44年11月15日号。
- 13) 1914年に巻ノ一, 巻ノ二, 巻ノ三の合本が出版された。
- 14) 『英語時事会話 巻ノ一』(1911年12月, ジャパン・タイムス社出版局)筆者所蔵。
- 15) 2003年9月6日, 筆者は日本英学史学会月例会で「頭本元貞と『英語時事会話』」と題して口頭発表を行った。T(教師), K(近藤), S(斎藤)のパートを出席者の先生方をお願いして発表をさせていただいた。その時にT(教師)を担当していただいたのが新渡戸稲造研究者松下菊人先生だった。残念なことに2014年5月に泉下の人となられた。遊び心をよく理解され, 筆者の論文も丁寧に読んでくださったことが思い出となっている。
- 16) 教材の所蔵先には次のようなところがある。東京書籍, 国立国会図書館, 花園大学, 岩手大学, 愛知教育大学, 筆者所有。また大村喜吉, 高梨健吉, 出来成訓編『英語教育史資料 第3巻 英語教科書の変遷』(東京法令出版, 1980年)も参考にした。和歌山大学江利川春雄代表による「明治以降外国語教科書データベース」[明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース]も一部分参考にした。
- 17) 1は岩手大学所蔵, 2, 3, 4, 5, 6は東書文庫所蔵を使った。
- 18) 1は花園大学所蔵を, 2から6までは東書文庫所蔵を使用した。
- 19) 1, 2とも東書文庫所蔵を使用した。
- 20) 1, 愛知教育大学所蔵, 2から5は東書文庫所蔵を使用した。
- 21) 大村喜吉, 高梨健吉, 出来成訓著『英語教育史資料 第3巻 英語教科書の変遷』東京法令出版, 1980年, 238-246頁。
- 22) ちなみにこの副読本は一音節の語を使って最も簡単に書き換え, 詳細の注解を加えたところ。さらに「読者諸君には, 進んでEveryman's Library中の*Aesop's Fable and Other Fables*を一読せられんことをお勧めする次第である」と記され, 未収録の話を読むように奨励している。
- 23) *Round the world with father*, 1927(昭和2)年5月初版, 中等教科書出版協会。106-107頁
- 24) 同上, 111-112頁。
- 25) 同上, 117頁。
- 26) 筆者所蔵。
- 27) 12月1日, 木曜日と印刷された一葉のカレンダーは1927年のものだと思われる。貴重な紙を学習ように使った時代を想起させてくれる。
- 28) 前掲, 大村喜吉, 高梨健吉, 出来成訓著『英語教育史資料 第3巻 英語教科書の変遷』259頁。



- 29) 同上, 272-275頁。
- 30) 同前, 275-276頁。筆者はこの2冊を捜しているが、まだ見つけることができずにいる。
- 31) 『英語教育史資料 第1巻 英語教育課程の変遷』東京法令出版, 1980年, 110-116頁。
- 32) 平成7年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究B(1))研究成果報告書。研究代表者 中村紀久二。
- 33) 同上, 64頁。
- 34) 同上, 64頁。
- 35) 筆者所蔵。
- 36) *Eigo Daigaku: The Herald of Asia College Edition*, 1924年1月1日号。
- 37) 略年譜作成に際しては次の著者作成のハンドアウト①②③と拙稿④を参考に加筆・修正を加えた。①2003年9月6日(土)日本英学史学会第386回例会(於: 拓殖大学文教キャンパス)にて発表した「頭本元貞と『英語時事会話』」のハンドアウトの略歴, ②2005年11月19日(土)太平洋問題調査会(IPR)研究部会2005年度第2回研究例会報告(於: 早稲田大学アジア太平洋研究センター712号室)にて報告した「頭本元貞と太平洋問題調査会」のハンドアウトの略歴, ③2006年7月15日(土)メディア史研究会(於: 東京経済大学)にて発表した「国策発信メディア人: 頭本元貞—第三回太平洋問題調査会を中心に—」のハンドアウトの略歴, ④拙稿「頭本元貞と太平洋問題調査会」(『近代日本研究』第25巻, 慶應義塾福沢研究センター, 2008年)。

(指導教授: 北村友人先生)

\*本論攷は特殊な事情により書き終えるまでに長年を要しました。そして2016年5月26日には前指導教授の金森修先生が泉下の人となられ、ご助言をいただく機会を失ってしまいました。

生前賜りましたご指導に対して感謝を申し上げ、この場をお借りして哀悼の意を述べさせていただきます。